

西三河における小学校社会科副読本の利用状況

松井 貞雄*

I はじめに

昭和53年の指導要領の改訂で、小学校3・4年生の社会科の学習内容は各市町村を素材とすることが主体となった。したがって、市町村別副読本の作成傾向に拍車をかけ、筆者も昭和46年以降ではあるが指導という立場でこれに参加したものが三河地方18市町村に及び、3年毎の改訂を重ねる傾向から之に相当な関心を持つこととなった。さき(1978)に、「小学校中学年社会科副読本作成の問題点」で、副読本の性格、作成上の問題点、利用上の配慮の3点に要約して、副読本作成を通じて地域学習の在り方を問題としたが、副読本作成に関係して10年を経過するのを契機に、どのように副読本が利用されているかを把握して、今後のために、副読本の作成と利用上の反省と問題点を明らかにしようとした。

II 調査方法

西三河地方の8市11町村の207小学校の3年担任594名・4年担任593名と複式担任28名の計1,215名の教師に対し、昭和55年度社会科学習指導実践にかかわる諸問題について、①社会科学習指導全般の問題、②現場学習・地域観察学習について、③社会科副読本について、④教科書についての4項目に、計35の設問を設けたアンケート調査を実施した。昭和56年3月1日に、8市教委並びに3教育事務所を通じて配布し、3月24日までに回収

願った。複式学級を除いて集計したが、回収率は3年担任が82.4%、4年担任が82.8%であった。この時期を選んだのは、学年末多忙な時期ではあ

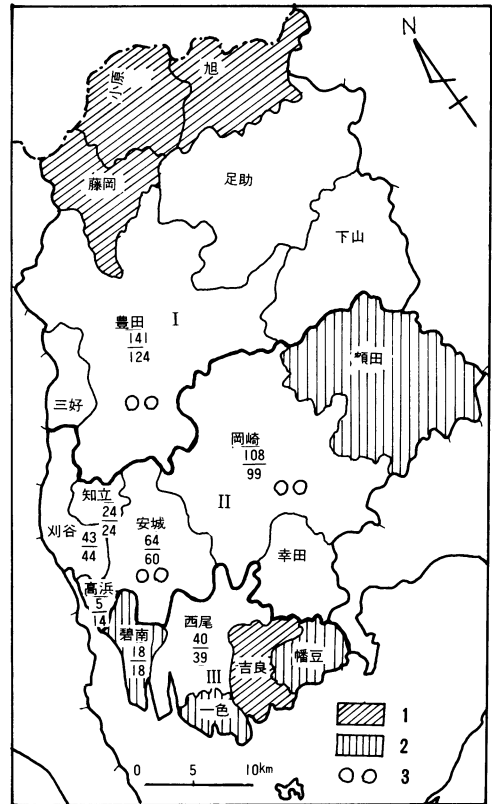


図1 アンケート調査地域(昭和56年3月)

1. 副読本がなかった市町村。2. 教科書と単元構成の異なる副読本や資料集を使っていた市町村。3. 3年用と4年用が分冊である市。数字の上段は3年担任、下段は4年担任の調査教師数。

* 愛知教育大学地理学教室

るが、おおよそ1年間の社会科学習を終えた時点であり、4月になると転任などがあって、実態把握に支障を来すと考えたからである。

今回は、このうちの副読本に関する10問を対象とし、必要に応じて回答者教師の性格・条件を示すこととした。回答者は、教師経験5年未満が3年担任48.3%・4年担任46.4%、女教師比率が3年担任55.8%・4年担任52.0%、師範学校・学芸大学・教育大学卒業者が3年担任50.0%・4年担任49.7%であって、いずれも約半数を占める。そして社会科を専門教科とする教師は20.7%・20.8%の低率であり、教科指導のうち社会科が一番嫌いであるとする教師は37.8%・23.5%とかなり高い。また平野部住宅地域の学校勤務が45.2%・47.0%、18～29学級の中規模校勤務教師が50.4%・48.7%であった。

この報告では、紙数制限もあって、地域的・市郡別に論じる余裕がない。本文記述を参考にしてこの点を統計表から読みとっていただければ幸いである。

III 副読本利用状況

副読本利用状況 副読本の利用度は、表1のように一般に高い。「ほとんど利用しなかった」割合が高いのは、副読本が作成されていない旭町・藤岡町・小原村・吉良町や、単元構成が教科書と異なる碧南市・額田町及び資料集はあるが副読本の体裁になっていない一色町・幡豆町などである(図1参照)ので、郡部・西尾地区・豊田地区になっている。しかし、これらはいずれも小規模校や学校数が少ないので、全体に対する割合はそれほど大きくは表われていない。これとは対照的に、「副読本を主とし、教科書はほとんど使わなかった」の比重は、3年に高く4年に低い。これは3年の副読本が教科書と全く同じ単元構成である市町村が多いのに対し、4年の副読本は全市町村が「い

表1 副読本はよく利用されましたか？
(昭和55年度)

地区		豊田 岡崎 西尾 計 市部 郡部						
		%		%		%		
3年担任	調査人数に対する回答比	a	3.1	1.1	8.3	2.9	1.8	10.8
		b	6.9	4.7	36.9	10.6	9.7	16.9
		c	48.1	41.2	29.8	41.5	40.8	44.6
		d	41.3	52.2	16.7	43.1	46.4	20.0
	無記入		1	2	7	10	5	5
	調査人数		160	274	84	518	453	65
4年担任	調査人数に対する回答比	a	12.5	2.3	13.4	7.2	5.2	20.6
		b	35.4	21.2	37.8	28.2	27.0	36.5
		c	44.4	66.8	28.0	53.6	57.1	30.2
		d	4.2	7.3	2.4	5.6	5.9	3.2
	無記入		3	3	10	16	10	6
	調査人数		144	259	82	485	422	63

- 回答
 - ほとんど、活用しなかった。
 - 教科書を主とし、副読本を従として使った。
 - 副読本を主とし、教科書を従として使った。
 - 副読本を主とし、教科書はほとんど使わなかった。
- 豊田地区＝豊田市・西加茂郡・東加茂郡、岡崎地区＝岡崎市・安城市・刈谷市・知立市・高浜市・額田郡、西尾地区＝西尾市・碧南市・幡豆郡
- 昭和56年3月調査。

ろいろな土地のくらし」という日本を代表する暖地・冷涼地などの学習を教科書にまかせて、副読本記述から除外しているからである。それにしても、「教科書を主とし、副読本を従として使った」割合が、4年生の郡部と郡部を含む西尾地区・豊田地区に高く、3年では西尾地区に高いのが注目される。その原因の一つは、前述の副読本作成に至らない町村や教科書と単元構成が合致しない副読本が作成されている市町のためである。いずれにしても、「副読本を主とし」て使用した割合は、3年担任の84.6%、4年担任の59.2%と高く、副読本使用は定着しているとみてよい。

この副読本がどのように使われているかを表2に示した。問題の第1点は、副読本の例示に準じて観察学習・地域学習を展開することが期待されるのに、「あまり地域観察に出かけられないので、副読本を読ませて内容について話し合う利用の仕方」を、3年担任で54.1%の教師が、4年担任で61.0%もの教師がしていることである。これは学習が国語的社会科学習に終わっていることで、副読本作成の趣旨に反した実態といえよう。第2は、「教科書のことを学習していて、自分たちの市や学校の近くはどうなっているかという学習に副読本を使う」教師が多い(3年担任34.2%・4年担任48.5%)点である。「教科書を主とし、副読本を従として使った」教師が設問(表1)より多いことを示していると同時に、これまた国語的社会科学習の傾向が強いことを示している。この国語的社会科学習の傾向は、地区別差異もあるが、3年より4年により強い。この点に関する副読本作成上の問題は、内容・記述を具体的にし過ぎるとか、現地へ出かけざるを得ないような記述を強めるとか、副読本使用に関する指導の徹底が必要であるなどが指摘できるが、これらの数値にみる限りでは、地域学習・現場学習・観察学習の不徹底の指摘はまぬかれない。第3点は、副読本は資料的利用の傾向が強い点である。特に「主に地図・グラフ・統計をみせる」が多い(3年担任45.8%・4年担任42.1%)。これに対し、写真や囲み記事(文章資料)の使用は意外に少ない(3年担任は26.7%と16.0%、4年担任は25.2%と15.7%)。第4点は、学習の運びの参考としている点が、3年担任では33.6%と高く、4年担任では18.8%と低い点である。4年生用副読本の記述の反省点であることを暗示している。ただ、「見学の予備知識を与える」使用は、3年担任で29.3%、4年担任で28.9%と、かなりの使用状況を示している。

表2 副読本を、どのように使っていますか？
(いくつ○をつけてもよろしい。)(昭和55年度)

回答	地区			計	市部	郡部		
	豊田	岡崎	西尾					
3 年 担 任	調査 人数 に 対 す る 回 答 比	a	11.3	19.7	9.5	15.4	16.1	10.8
		b	27.5	31.8	25.0	29.3	30.9	18.5
		c	62.5	52.6	42.9	54.1	55.4	44.6
		d	40.0	24.1	56.0	34.2	32.7	44.6
		e	18.8	21.5	11.9	19.1	19.6	15.4
		f	35.0	26.6	10.7	26.7	27.8	18.5
		g	53.1	43.8	38.1	45.8	46.8	38.5
		h	21.3	17.2	2.4	16.0	16.1	15.4
		i	27.5	41.6	19.0	33.6	35.3	21.5
		j	0.6	1.5	2.4	1.4	1.5	0.0
		その他	1.3	0.0	0.0	0.3	0.4	0.0
		無記入	3.1	4.0	16.7	5.8	4.4	15.4
		回答総数		483	779	197	1,459	1,301
調査人数		160	274	84	518	453	65	
4 年 担 任	調査 人数 に 対 す る 回 答 比	a	11.8	15.8	3.7	12.6	13.0	9.5
		b	31.9	31.3	15.9	28.9	29.1	27.0
		c	63.2	61.0	57.3	61.0	62.1	54.0
		d	50.7	47.5	47.6	48.5	48.6	47.6
		e	8.3	9.7	2.4	8.0	8.3	6.3
		f	27.1	25.1	22.0	25.2	25.6	22.2
		g	50.7	40.2	8.5	42.1	42.7	38.1
		h	20.8	1.2	15.9	15.7	15.6	15.9
		i	3.5	20.8	14.6	18.8	19.4	14.3
		j	0.0	0.0	1.2	0.2	0.2	0.0
		その他	2.1	2.3	0.0	1.9	1.7	3.2
		無記入	2.1	2.3	22.0	5.6	3.3	20.6
		回答総数		412	696	193	1,301	1,138
調査人数		144	259	82	485	422	63	

1. 回答
 - a. 学習の計画を話しあうとき。
 - b. 見学前の予備知識を与えるとき。
 - c. あまり地域観察に出かけられないので、副読本を読ませて、内容について話し合う利用の仕方。
 - d. 教科書のことを学習していて、自分たちの市や、学校の近くはどうなっているかという学習に、副読本をつかう。
 - e. 学習のまとめ方について、モデルに利用する。
 - f. 主に写真をみさせる。
 - g. 主に地図・グラフ・統計をつかう。
 - h. 主に囲み記事(文章資料)を利用する。
 - i. 副読本に合わせて、計画・見学・話し合い・まとめなど、学習活動の運びの参考にする。
 - j. 副読本を教科書として使用する。
2. 3. は表1と同じ。

副読本を資料的利用に限定して「どんな資料を多く使うか」を問うと、表3のような結果を得た。回答者は平均4項目に○印をつけたが、地図・グラフ・写真・表は60%以上の教師が利用としている。次いで利用の多いのは本文と囲み記事(文章資料)であるが、地図・グラフ・写真・表の利用とはかなりの差がある。文章に弱いといわれる現代っ子に関して、こうした所にも反省があってよいのではなからうか。また、筆者は、これらの資料を、より抽象的資料とより具体的資料という視点に分けて考えたい。具体物を数値に置きかえた統計、それをグラフ化し地図化したものは、いずれも抽象的資料であり誰もが同じ回答を導くもので、このような抽象的資料は「わからせるため」の資料であって高学年向きである。これに対し、写真や文章資料や本文記述などの資料は、現地観察や視聴覚資料と同様に、受けとめ方が児童個人々人によって異なり、直接的資料であり具体的資料である。「わからせる」資料に対しては「推測を豊かにし」「感動させる」ことのできる資料であって、話し合いを豊かにする低・中学年向きの資料と考える。文章資料や写真の使用方法が検討される必要がある。さらに、まとめページ・計画ページ・オリエンテーションページなど、学習活動の運びにかかわるページの利用が低率なのは、問題解決学習的な学習活動が低調であることを示すものではあるまいか。

以上、設問1～3の副読本使用状況を総括すると、問題相互間に矛盾を感じさせる回答もあるが、利用度は高く、中学年社会科は教科書よりは副読本使用が中心の学習になっていると考えられる。その使用方法・利用資料からみると副読本の国語的社会科学学習の傾向が強く示されていて、地域学習・現場学習・観察学習などの手引き・参考・比較学習利用になっていないことが指摘できる。これは使用者の意識改善が必要であると共に、副読

表3 どんな資料を、多くつかいますか？
(いくつ○をつけてもよろしい。)(昭和55年度)

回答		地区			計	市部	郡部		
		豊田	岡崎	西尾					
3	年 担 任	調査 人数 に 対 す る 回 答 比	a	68.8	67.2	54.8	65.6	66.9	56.9
			b	78.8	79.9	78.6	79.3	79.5	78.5
			c	67.5	71.2	63.1	68.5	68.9	66.2
			d	62.5	57.3	65.5	60.2	60.7	56.9
			e	39.4	36.5	8.3	32.8	36.2	9.2
			f	42.5	42.3	26.2	39.8	21.2	44.6
			g	15.0	17.5	10.7	15.7	16.7	7.5
			h	7.5	9.5	4.8	8.1	8.8	3.1
			i	4.4	6.2	1.2	4.9	5.1	3.1
			その他	0.0	2.2	0.0	1.2	1.3	0.0
			無記入	3.8	2.9	14.3	5.0	4.0	12.3
回答総数		624	1,076	274	1,974	1,754	220		
調査人数		160	274	84	518	453	65		
4	年 担 任	調査 人数 に 対 す る 回 答 比	a	70.8	74.1	62.2	71.1	73.7	54.0
			b	83.3	78.8	73.2	79.2	80.6	69.8
			c	79.2	76.8	68.3	74.2	75.4	66.7
			d	67.4	60.6	52.4	61.2	63.0	49.2
			e	38.9	44.4	23.2	39.2	42.4	17.5
			f	44.4	42.1	36.6	41.9	41.5	44.4
			g	11.8	8.9	7.3	9.5	9.2	11.1
			h	4.2	5.8	6.1	5.4	5.5	4.8
			i	5.6	3.5	4.9	4.3	4.5	3.2
			その他	3.5	3.1	1.2	2.9	3.3	0.0
			無記入	0.7	1.6	17.1	3.9	1.9	17.5
回答総数		581	1,035	289	1,905	1,692	213		
調査人数		144	259	82	485	422	63		

1. 回答 a. 写真
b. 地図
c. グラフ
d. 表
e. 囲み記事(文章資料)
f. 本文
g. まとめページ
h. 計画ページ
i. オリエンテーションページ
その他。(図書・スライド・VTR・FMテープ・模型・新聞きりぬき等)
2. 3. は表1と同じ。

本作成上の緻密な配慮を必要としている。

副読本の評価 以上のような副読本利用状況に対し、教師は現在の副読本をどのように評価しているのだろうか。

表4 副読本は、子供にとって、むずかしい
でしょうか？ (昭和55年度)

A. その内容

回答	地区			計	市部 郡部			
	豊田	岡崎	西尾		%	%	%	
3 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	3.8	2.9	4.8	1.5	3.5	3.1
		b	44.4	41.6	38.1	41.9	42.2	55.4
		c	44.4	50.4	38.1	46.5	47.7	38.5
		d	4.4	2.6	2.4	3.1	2.9	4.6
		e	0.0	0.4	0.0	0.2	0.2	0.0
		無記入	3.1	2.2	16.7	4.8	3.5	13.8
調査人数		160	274	84	518	453	65	
4 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	3.5	11.6	1.2	1.9	1.7	3.2
		b	27.8	17.0	30.5	22.5	22.3	23.8
		c	59.7	70.3	40.2	62.1	64.7	44.4
		d	6.9	8.9	6.1	7.8	8.3	4.8
		e	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		無記入	2.1	2.7	22.2	5.8	3.1	23.8
調査人数		144	259	82	485	422	63	

B. その表現

3 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	6.3	2.6	6.0	4.3	4.4	3.1
		b	45.6	41.6	36.9	42.1	41.7	44.6
		c	39.4	46.7	35.7	42.7	44.2	32.3
		d	4.4	6.2	3.6	5.2	5.5	3.1
		e	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		無記入	4.7	2.9	17.9	5.8	4.2	17.0
調査人数		160	274	84	518	453	65	
4 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	5.6	1.2	2.4	2.7	2.6	3.2
		b	29.2	2.7	25.6	24.7	22.5	39.7
		c	56.9	61.0	41.5	56.5	60.2	31.7
		d	4.2	12.7	7.3	9.3	10.4	1.6
		e	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		無記入	4.2	3.1	23.2	6.8	4.3	23.8
調査人数		144	259	82	485	422	63	

1. 回答

- a. 大変むずかしい。 d. やさしい方と思う。
b. 少しむずかしい。 e. やさしい。
c. 普通である。

2. 3. は表1と同じ。

表4は、副読本が児童にとってむずかしい内容・表現であろうかどうかを問うた結果である。表現・内容ともに大差はないが、「普通である」と「少しむずかしい」で大半を占めていて、児童の発達段階に応じた副読本のできばえと評価されてい

表5 どのような資料やページをふやしたらよい
でしょうか？ (いくつ○をつけてもよろしい。)
(昭和55年度)

回答	地区			計	市部 郡部				
	豊田	岡崎	西尾		%	%	%		
3 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	73.1	74.5	64.3	72.4	73.3	66.2	
		b	50.0	49.6	28.6	46.3	47.0	41.5	
		c	48.1	47.1	25.0	43.8	44.6	38.5	
		d	38.1	38.8	25.0	36.1	36.4	33.8	
		e	24.4	27.4	16.7	24.7	24.7	24.6	
		f	4.4	3.3	4.8	3.9	3.8	4.6	
		g	6.3	8.4	8.3	7.7	8.4	3.1	
		h	6.9	5.5	8.3	6.4	6.6	4.6	
		i	8.1	6.7	8.3	6.8	6.2	10.8	
		その他	0.0	0.4	1.2	0.4	0.4	0.0	
無記入		8.8	11.3	22.6	12.4	10.8	23.1		
回答総数				429	746	176	1,351	1,188	163
調査人数		160	274	84	518	453	65		
4 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	73.6	71.4	62.2	70.5	72.5	57.1	
		b	54.2	50.6	39.0	49.7	50.5	44.4	
		c	58.3	56.8	47.6	55.7	56.6	49.2	
		d	53.5	45.9	35.4	46.4	47.2	41.3	
		e	43.1	36.3	20.7	35.7	36.7	28.6	
		f	10.4	3.5	3.7	5.6	5.5	6.3	
		g	7.6	3.1	4.8	4.7	4.7	4.8	
		h	2.1	3.1	4.8	3.1	3.1	3.2	
		i	2.1	5.0	6.0	4.3	3.8	7.9	
		その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
無記入		3.5	6.6	18.3	7.6	5.9	19.0		
回答総数				444	731	199	1,374	1,209	165
調査人数		144	259	82	485	422	63		

1. 回答

- a. 写真 f. 本文
b. 地図 g. まとめページ
c. グラフ h. 計画ページ
d. 表 i. オリエンテーションページ
e. 囲み記事(文章資料)

2. 3. は表1と同じ。

るとみてよい。この傾向は地区別・市郡別に差があるように見えるが、無記入の比重の差によるところが大きい。しかし、3年用は「少しむずかしい」傾向が、4年生用より強い。

改善方向として「どのような資料ページをふやしたらよいか」を問うた。表5のように、3・4年の別なく、地区別・市郡別の差もなく、写真ペ

表6 写真には、解説文があった方がよろしいか、
なくてもよろしいか？ (昭和55年度)

回答		地区			計	市部 郡部		
		豊田	岡崎	西尾		計	市部	郡部
3 年 担 任	回 答 比	a	81.3	84.7	76.2	82.2	82.8	78.5
		b	14.4	11.3	9.5	12.0	12.1	10.8
		c	1.3	0.4	0.0	0.6	0.7	0.0
		無記入	3.1	3.6	14.3	5.2	4.4	10.8
	調査人数	160	274	84	518	453	65	
4 年 担 任	回 答 比	a	83.3	80.0	65.9	78.6	79.1	74.6
		b	16.0	17.0	13.4	16.1	17.1	9.5
		c	0.0	0.7	0.0	0.4	0.5	0.0
		無記入	0.7	2.3	20.7	4.9	3.3	15.9
	調査人数	144	259	82	485	422	63	

1. 回答 a. あった方がよい。
b. ない方がよい。
c. どちらともいえない。
2. 3. は表1と同じ。

ージの増加を望む教師が70%をこえている。次いで地図・グラフ・表の抽象的・間接的資料が40~50%の教師に増加希望がある。これに次ぐものが囲み記事(文章資料)であるが、3年担任の24.7%、4年担任の35.7%に増加希望があつて注目される。これは地区による差がみられ、また郡部より市部勤務の教師の方が希望率が高い。

筆者は、写真に資料性を高めるために、細字で100字内外の解説をつけて、写真の見方や学習資料として取り上げたい点を明らかにすることを強調してきた。写真の中の具体物を学習材料とすることは、現地観察の目を高めることに連動するからでもある。しかし、児童に学習問題を発見させるためには、答えとしての解説はない方がよいとする意見もかなりある。表6では「あった方がよい」とする教師が、3年は82.2%、4年は78.6%に達していて圧倒的である。しかし、「なくてもよい」とする教師が総数で62名(12.0%)に達していることも、またみのがせない。一般に、資料に関しては、資料に関する知識を一問一答で押さえさせることだけでなく、その知識を確認した上で、

表7 副読本は、あった方がよいか？
なくてもよいか？ (昭和55年度)

回答		地区			計	市部 郡部		
		豊田	岡崎	西尾		計	市部	郡部
3 年 担 任	回 答 比	a	91.9	91.2	78.6	89.8	89.0	92.3
		b	0.6	1.8	6.0	2.1	2.4	0.0
		c	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		無記入	7.5	6.9	15.5	8.5	8.6	7.7
	調査人数	160	274	84	518	453	65	
4 年 担 任	回 答 比	a	86.8	89.2	78.0	86.8	87.9	77.8
		b	2.1	2.3	2.4	2.3	1.9	4.8
		c	0.7	0.0	0.0	0.2	2.4	0.0
		無記入	10.4	8.5	19.5	10.9	10.0	17.5
	調査人数	144	259	82	485	422	63	

1. 回答 a. あった方がよい。
b. なくてもよい。
c. むしろない方がよい。
2. 3. は表1と同じ。

それを使用して考えさせたり学習意欲を盛り上げるような質問・問題提起を考える教師を期待したい。したがって、この写真解説については、解説利用方法の工夫・考慮が正しくなることを望むものである。

総括して、「副読本はあった方がよいか？ なくてもよいか？」の問いに対しては、圧倒的に「あった方がよい」とする教師が多い(3年担任89.8%、4年担任86.6%)。「教科書と副読本の両方で児童の負担が大きすぎる」といった意見もあれば、「副読本に地域学習の答えが出てしまっているのではない方がよい」とも言われてきたが、一般的には、地域学習主体の社会科学習には副読本はなくてはならないものとして定着してきたものと考えられる。**副読本の問題点** 副読本の問題点を問うたら、約90%の教師が指摘し、平均1.6の回答をした。第1点は、3年担任も4年担任も、そして地区別・市郡別を問わず、「副読本と教科書の構成がちがついて、あつかいにくい」と指摘する教師が多い(3年担任34.0%・4年担任36.9%)ことである。次いで「教科書と両方で、教材が多すぎる」が多い(3

表8 副読本の問題点は、どんなことでしょうか？
(いくつ〇をつけてもよい。) (昭和55年度)

回答		地区			計	市部	郡部	
		豊田	岡崎	西尾				
3 年 担 任	調査 人数 に 対 す る 回 答 比	a	24.4	25.5	10.7	22.8	23.0	6.2
		b	28.1	27.7	34.5	29.0	30.0	23.1
		c	19.4	19.7	20.2	20.0	21.4	7.7
		d	21.9	9.5	11.9	14.0	13.2	18.5
		e	43.1	27.7	36.9	34.0	33.6	37.0
		f	5.6	6.6	7.1	6.4	6.2	7.7
		g	16.9	14.6	10.7	14.7	12.8	12.3
		h	4.3	10.2	7.1	7.9	8.2	6.2
		その他	2.5	3.3	6.0	3.5	3.1	6.2
	無記入	5.6	9.9	18.0	10.0	9.3	15.4	
回答総数		275	425	138	838	727	111	
調査人数		160	274	84	518	453	65	
4 年 担 任	調査 人数 に 対 す る 回 答 比	a	22.2	30.5	6.1	23.9	24.4	20.6
		b	26.4	31.7	34.1	30.5	30.8	28.6
		c	25.0	20.1	8.5	19.6	21.3	7.9
		d	15.3	13.9	9.8	13.6	14.0	11.1
		e	42.4	35.9	30.5	36.9	36.5	39.7
		f	4.2	3.9	7.3	4.5	4.5	4.8
		g	7.6	6.6	9.6	7.4	7.3	7.9
		h	6.9	5.4	8.5	6.4	6.4	6.3
		その他	5.6	6.2	3.7	5.6	5.5	6.3
	無記入	6.3	6.6	28.0	10.1	8.5	20.6	
回答総数		233	416	120	769	672	97	
調査人数		144	259	82	485	422	63	

1. 回答
 - a. 副読本があると、読めばわかってしまうので、かえって国語的社会科学習になってしまう。
 - b. 教科書と両方で、教材が多すぎる。
 - c. 副読本だけだと、視野が狭くなり、考えがよくなるのではないかと心配になる。
 - d. 副読本をどのように利用したらよいか、わからない。
 - e. 副読本と教科書の構成がちがっていて、あつかいにくい。
 - f. 副読本の内容がむずかしい。
 - g. 副読本は表現がむずかしい。
 - h. 副読本は、量的に内容が多すぎる。
2. 3. は表1と同じ。

年担任29.0%・4年担任30.5%)。これらは、副読本が教科書に準拠しながら各市町村に適応した単元構成をしているので、副読本主体の学習展開をすれば目的が達成されるはずであるにもかかわらず

ず、教科書重視の観念が強いことをここに示しているともみてよい。したがって第3に、「副読本だけでなく、視野が狭くなり、考えがよくなるのではないかと心配になる」教師が、3年担任で20.0%、4年担任で19.6%と高くなっている。この点の警戒と配慮は不必要というのではないが、3・4年の指導要領に示された学習内容に関する意識不足が暗示されている。こうした傾向もあって、「副読本をどのように利用したらよいかわからない」教師も、3年担任に14.0%、4年担任に13.6%あることもみのがせない。第2の問題点は、「副読本があると、読めばわかってしまうので、かえって国語的社会科学習となってしまう」とする教師が、3年担任に22.8%、4年担任に23.9%とかなり高い点である。最も警戒すべき点である。第3点は、現行副読本はその内容・表現ともに「むずかしい」とは受けとめられておらず、また「内容が多すぎる」ということも問題になっていない点である。繰り返す改訂の中で、副読本作成作業が上達してきているともみてよい。

しかし、いくつかの改善点を表9のように指摘していて、現状満足とは必ずしもいえない。表9は1教師平均1.8の回答をしたものであるが、圧倒的希望は「資料が豊富な副読本にしてほしい」(3年担任68.0%・4年担任73.0%)であって、資料型副読本指向である。対照的な「副読本をモデルにすればよいような、学習方法を主体としたものにする」という学習方法型副読本への指向は少ない(3年担任18.7%・4年担任15.7%)。これは副読本作成委員となる経験豊かな教師グループの後者主張に対し、使用教師の希望が大きく異なるところである。次に多いのが「子供が書き込み、作業が一部できるような副読本」で、3年担任39.0%・4年担任38.6%の教師が希望している。これも資料型副読本への指向の一端ともみてよい。さらには「設問を多くして、問題をおこさせる工夫を

表9 副読本で、改訂したい点は、どのようなところか？（いくつ○をつけてもよろしい。）
(昭和55年度)

回答		地区			計	市部 郡部		
		豊田	岡崎	西尾		市部	郡部	
3 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	21.3	17.5	17.9	18.7	19.4	13.8
		b	72.5	65.3	67.9	68.0	69.5	56.9
		c	10.0	8.8	17.9	10.6	8.8	23.1
		d	40.0	34.7	26.2	34.9	35.8	29.2
		e	45.6	38.3	28.6	39.0	38.9	40.0
		f	1.3	4.4	3.6	3.3	3.3	3.1
		その他	0.0	2.6	1.2	1.5	1.3	3.1
	無記入	4.4	5.8	15.5	6.9	5.7	15.4	
	回答総数	312	486	150	948	828	120	
	調査人数	160	274	84	518	453	65	
4 年 担 任	調査人数に対する回答比	a	13.2	18.5	11.0	15.7	16.6	9.5
		b	80.6	71.8	63.4	73.0	74.2	65.1
		c	9.0	6.9	8.5	7.8	7.6	9.5
		d	36.1	33.2	23.2	32.4	31.5	38.1
		e	44.4	38.6	28.0	38.6	39.1	34.9
		f	0.0	7.7	4.9	4.9	5.7	0.0
		その他	0.9	0.4	0.0	0.4	0.5	0.0
	無記入	6.3	4.2	22.0	7.8	5.9	20.6	
	回答総数	274	470	132	876	764	112	
	調査人数	144	259	82	485	422	63	

1. 回答

- 副読本をモデルにすればよいような、学習方法を主体としたものにする。
 - 資料が豊富な副読本にしたい。
 - 会話形式にして、子供にしたしみやすいものにした。
 - 設問を多くしたりして、問題意識をおこさせる工夫をしたい。
 - 子供が書き込め、作業が一部できるものにした。
 - 現状でよい。
- その他。(大版(B5版)にしたい、カラーページを多くしたい、等々。)

2. 3. は表1と同じ。

したい」が3年担任の34.9%、4年担任の32.4%の教師に求められている。これらは好ましい意見・希望ではあるが、学習課題を教師が児童と共に設定して学習展開をすることを不得手として、副読本にそれを提示されることを求めている、副読本依存型を色濃く出しているものともみられるのではあるまいか。その他は、副読本の大型化(B

5版)を求め、カラーページの増加を求めているが、副読本作成の経費高を理解しない意見である。教師は、児童の直感的興味を満たすよりは、質の高い学習意欲の高揚に自らの務めを意識すべきではなかろうか。

以上を総括すると、副読本作成委員の理想的な考え方に対し、使用者は副読本依存の性格をいよいよ強めていて、担任教師の主体性の欠除を感じさせられる。

IV 若干の考察と提言

筆者は、小学校社会科副読本の好ましい編集と利用を、次のようにしたいと考える。中学年社会科学習は、学区または自市町村において、具体的な社会的事象の学習課題を把握して、問題解決学習方法で追求的に連続的に学習を運ぶものである。副読本は、この学習の手引き・モデルとなるように、学習計画・地域学習・まとめに至る学習の流れに沿って、地域選定や指標選定を適切にし、地域学習の方法や実践の実例を示し、適当な設問で学習の意欲を高めて、具体的な学習活動の方向づけをするように編集することが望ましい。学習指導を行なう教師には、副読本のよりよい利用方法を研究し、副読本の記述内容を知識として児童に修得させるだけでなく、副読本を手引き・モデルとして、活発な地域学習・観察学習を実践することを期待したい。このような編集態度と利用方法を念願する立場で、上述のアンケート結果から導き出される若干の点について考察し、今後のよりよい副読本作成と副読本利用の在り方について提言したい。

副読本利用研究の必要性 アンケート集計結果では、副読本は「あった方がよい」とする教師が圧倒的(3年担任で89.8%、4年担任で86.6%)であり、副読本の内容・表現の難易の評価に対しては「普通である」と「少しむずかしい」とする両者

でそれぞれ80%以上に達し、教科書を使用するか否かは別として「副読本を主とし」で使用している教師が3年担任で84.6%、4年担任で59.2%となっている。この結果からみれば、中学年社会科が地域を対象とし地域素材を教材とする学習目標であるために、小学校社会科副読本の存在は大きく、また期待され、その使用は定着したものとみてよい。

この副読本の存在が大きい上に使用が定着しているという判断から、副読本の編集と利用に関する現在の実状に関連して、いくつかの問題が提起される。第1は、編集に関してであって、副読本は教科書編集レベルに達しているか、地域学習にとって副読本が教科書に勝る内容はどの範囲であるか、記述・表現が教科書と異なるのが当然である点はどこか等が、十分に検討される必要があることである。第2は、副読本利用に関する担任教師の姿勢にかかわる問題である。中学年社会科の学年の目標からみて、教科書と副読本は学習活動にとって如何なる存在であるかが、これまた十分に意識されているのであろうか。このアンケート結果は、この点の疑念を濃厚に提起しているように考えられる。以下、利用上の問題点と、作成上の問題点とを主として考察する。

副読本利用上の問題点 3年の主要学習単元のうち、「学区のようす」「工場のしごと」「田や畑のしごと」「店のはたらき」「市のうつりかわり」は大部分が地域学習(見学・調査活動による問題解決学習)を学習方法として期待するもので、地図・統計・グラフ・写真などの利用による間接学習となる傾向の強いのは「市全体のようす」と「県内のほかの市や町」の2単元にすぎない。4年の場合も同様であって、「いろいろな土地のくらし」以外は、「けんこうな生活」「安全な生活」「公共施設」「きょうどの開発」などのほとんどの学習単元には、地域学習の問題解決学習方法が期待されてい

る。このことは、低学年の現場学習主体と同様であると同時に、5年以上の社会科学習と大きく異なり、教室内で教科書・資料集を主体に話し合い学習が行われる他教科とも異なる。また、教師達自身が中学から大学に在学中の「教えられた経験」による各教科の学習形態とも大きく異なるところである。この認識と自覚の欠除が、小学校中学年社会科の実践と副読本利用をゆがめ、副読本と教科書に対する偏見と過大な期待をもたせている。多くの教師が、地域観察に出かけないで、副読本を読ませ話し合っ内容を理解させるとか、地図・グラフ・表・写真の利用が副読本利用の中心であるとしたり、副読本にはさらに写真・地図・グラフ・統計など、抽象的資料で国語的社会科学習がしやすい資料の増加を求めている。また、教科書を主に、副読本を従として使用する教師がかなりあり、教科書と両方で教材が多すぎるとか、副読本と教科書の構成が異なって扱いにくい等を、約30%の教師が問題視している。このアンケート結果では、担任教師の副読本の受けとめ方、利用上の問題意識の欠除が露呈したとみてよい。

地域学習主体に編集されている副読本を使用しているならば、一単元の大きな学習活動の流れも、また、どのように導入をはかるか、どのように学習課題を設定して学習計画をたてるか、どこを、いつ、どのように観察学習させたらよいか、どこで、何を教材として取り上げ、どのような資料を得させたらよいか、どの種の資料ではどんな追求の話し合いが可能であるか、子供たちにまとめさせる方法・手段はどうあるべきか、等々の単元内の一つ一つにも、モデルとするに値して示されているとみてよい。副読本利用は、これを学習展開の手引きとし、学習活動の対比資料として、地域学習が活動に展開されることが期待される。これが実践されるか否かは、中学年社会科の目標の認識と意識にかかわり、今後、長く地域学習を実践

する意欲を左右するものと思われる。

副読本編集上の問題点 初歩的な編集上の問題点の一つは、教科書の「わたしたちの市」を固有名詞に置きかえた程度の副読本で満足する傾向も少なくない点である。教科書は、抽象的表現ながら固有名詞を伏せた実在地域をモデルとする場合が多いが、それにしても抽象的な内容と表現が少なくない。自市町村副読本であったならば当然に具体的な内容と記述がなされるべきところを、教科書に準拠して具体化が不十分に終わる傾向がある。これは、地域素材の教材化に際し、地域選定・指標選定から教材分析などの、取材の徹底を欠くことにも由来している。副読本は、地域素材の取り上げ方において、また地域観察学習の記述内容などにおいて、教科書と同程度の具体性であったらば満足できないと考える。

次に、社会科学習指導の経験豊かな教師グループによる編集方針と、利用する中学年担任教師の社会科学習指導の理解・認識や副読本に対する考え方の「ずれ」の問題がある。このアンケートでは、執筆者・編集者グループと利用者グループの対照的意見も確認する性格ももたせている。どの市町村も、また改訂ごとに繰り返される編集方針の論議の中にも、学習内容的(要素的)な副読本よりは学習方法を主体とした副読本にしたい、問題を投げかけながら直後に答えが記述してあるような副読本ではいけない、写真の解説文は児童に発見させる方がよいので無い方がよい、等々の経験豊かな教師達が使用する上に理想とする副読本を期待する意見がかなり強く出る。しかし、アンケート結果に表われた利用者としての学級担任教師の期待とは大きくずれている。教科書の編集と作成は、執筆者・編集者・会社スタッフが長期間連続的に研究と作成作業をしていて、児童の学習意欲を高めるための学習活動を重視した教科書づくりを重ねてきている。短期間で作成される市町村

単位の副読本作成は、この面に関する限りは教科書作成のレベルに達し難いが、地域学習の具体性を強く出すことは地域学習の経験豊かな教師達が教科書レベルを越える可能性は少なくないと思われる。そして副読本には、写真の解説や文章資料などの具体的記述があった方がよく、設問に対する答えがあっても差しつかえない。経験豊かな教師には、それがあから望ましい授業ができないというのではなく、それを活用して、多彩にして質の高い学習展開を実践する努力こそ期待したい。知識不足・資料不足の状態に児童を置いて、児童に適切な回答を求め、意義ある発見を期待することが、そして、それで以て内容豊かな学習展開がどの教師にも期待できるとは考えられない。教科書の、オリエンテーション・学習計画・学習活動・まとめの学習活動の大きな流れに準拠しながら、地域学習に具体性を強く出すことを、副読本作成に期待したいのである。

副読本が学校単位でなく市町村単位で編集されることは、副読本がミニ教科書の性格に止まっていることになる。したがって副読本がそのまま国語的社会科として使用されるならば、副読本作成の趣旨に逆行する。学習活動の展開の各段階で、モデルとして使用されることが期待される。したがって、地域学習を実践せざるを得ないような設問や単元構成・単元展開を、副読本にはできるだけ盛り込む努力が必要である。アンケート結果から推測される西三河地域の中学年社会科学習指導の実情からすれば、副読本は、児童用であると同時に、教師への地域学習実践の啓蒙書の役割りを果たすものになることが期待される。

残された問題 このような実情認識の中では、豊田市が実施したような年度初めに3・4年担任教師全員に対する副読本の編集方針と使用上の力点の説明会を催すこと、しかも毎年繰り返すことが有効な手段であろう。また、副読本利用型学習指

表10 西三河における調査教師の諸指標別人数
(昭和55年度)

諸 指 標 別	年 別	調 査 人 数	教師経験	師範・学	社会科を	社会科が	住宅地域	18~29学
			5年未満 教師	芸大・教 育大の卒 業教師	専門教科 とする教 師	一番きら いな教科 の教師	の学校に 勤務する 教師	校の中規 模校に勤 務する教 師
実 数	3年	518	250	259	107	196	234	261
	4年	485	225	241	101	114	228	236
(人)	計	1,003	475	500	208	310	462	497
比 率	3年	100.0	48.3	50.0	20.7	37.8	45.2	50.4
	4年	100.0	46.4	49.7	20.8	23.5	47.0	48.7
(%)	計	100.0	47.4	49.9	20.7	30.9	46.1	49.6

(昭和56年3月調査)

導の実践研究(授業研究)を進めることが必要であ
らう。各市が実施している新任教師の市内施設の
社会科巡検なども、公共施設や工場等へ引率はす
るが、施設内案内は施設在勤者にまかせる程度の、
副読本使用と分離した巡検では満足できない。要
するに、副読本使用にかかわる地域学習の指導と
研修の必要性を感じさせられる。

ところで、アンケートにみられる副読本利用の
問題点の基盤をなす3・4年担任教師の性格・条
件を表10に示した。平野部住宅地域の中規模校勤
務の教師がほぼ半数を占める。圧倒的に女教師と
経験の少ない教師が中学年担任と予測され勝ちで
あるが、これらの教師は調査人数の約半数にとど
まり、また師範学校・学芸大学・教育大学の卒業
者がほぼ半数を占めている。小学校教員構成の全
体像からみて、中学年担任教師はかなり充実して
いる。その中で社会科教育・副読本使用が必ずし
も期待通りになっていないことについては、教育
大学における教科教育の反省点の一つでもあるし、
社会科を専門とする教師が20.7%もありながら、
教科指導の中で社会科が一番嫌いとする教師が

30.9%も中学年担任になっている点が問題である。
社会科指導の充実には、まず教師が社会科学習指
導が好きになり興味を持つことが大切であり、そ
れへの施策と指導が急務であると考えられる。

なお、副読本使用は、地域学習に密着したもの
であるので、同時にアンケート調査した地域学習
の実践について、稿を改めて報告したいと考える。

謝 辞

この小論を、本学の要請に応じて社会科教育専任として
赴任され、短期間とはいえ密度の濃い、そして誠実に社会科
教育の指導をしていただいた榎原康男先生に感謝の意をあら
わし、定年ご退官を記念して捧げる。なお、アンケートに
ご協力いただいた西三河全域の教育事務所・市教育委員会・
小学校長並びに3・4年担任教諭の各位に御礼を申し上げ
る。

参考文献

- 松井貞雄(1978)：小学校中学年社会科副読本作成上の
問題点 愛知教育大学地理学報告 47号 PP.
188~195.
- 東京教育研究所(1978)：小学校社会科3・4年用副読
本作成の手引き 東京研究報告 No.2 68ページ
- 吉田迪子(1978)：鳥取県社会科副読本——わが県の
社会科副読本 34——社会科教育 No.171 明治図
書 PP.126~131.
- 日台利夫(1977)：社会科副読本の扱い方 社会科教育
No.168 明治図書 PP.116~120.
- 愛知県教育センター社会科調査係(1970)：小学校第3
学年の使用社会科副読本についての調査結果の
一部 PP.1~16.